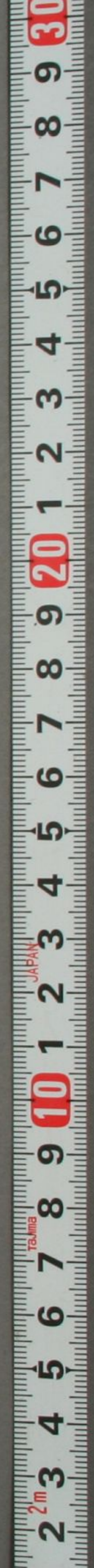




訓
語
桃
の
花

中村俊定文庫
文庫 18
251



諧部

桃

櫻

左

五文目

梅與柳色于春者也
其角占嵐雪谷子世者
也。二子蕉門拔群人如
以蓋子作句模樣其角
如梅花帶雪優美有
力嵐雪如柳紫帶風

淡美有味，呼嗟丁亥春
二月二十有九日。其角回，
冬十月十有五日。嵐雪二
子物故，清不及。余老，可惜
哉。余与子角，作鄰，締
交。又有時而，語子嵐雪。

今也，其時人，幾希。巴人，蒼
宋阿。君位子，浴有年。六又
到江都，而住。余亦話昔
者，唯在斯人而已。於此
者，意子，悼子。子角，嵐雪
三十，二面，忘。清，余子，序。

不^レ放^ラ辭^ヤ於^レ是^テ希^ク書^ス

己未春

式部井

午寂翁識



亡師三十三年

幼童八時

日一〇〇〇



世を足進ハおとこぼりや江戸橋	宋阿
三月比の菜ち骨小とい	超波
春るよ誰う菜め一袋焚そめ	珪琳
欠をうつる人も吹出は	砥丞
桂氣おほへと星の六七	单塔
み子さうは皮よ瓢箪子露	其川

上

三

龍もつり所ふつむ秋乃炭藪 百唐
 子を繪にせんと人ふおし流 有佐
 液一舟歌り 追しと糸道子 平砂
 恋のこま荷ふ路のうぶ 珪琳
 奥方孔子哉尺光えり 紫屋 祗丞
 二階下る飯時乃下化 宋阿
 月夜く連とる流 羈 旅 其川
 小乃師走忠波もみうま 百菴
 あり且ぬいりうらなうせれ 有佐
 服能かこまいとく 原 羊信

花ふれ乃ちうらなふ似の旋何里 平砂
 社日ふもやよ酒おいや 有佐
 ナ
 飛さ何やの猿うらなめるまき南 珪琳
 龍子忠所を兼承と信元 祗丞
 扣り進つ帰れんそおそ海しよ 百庵
 寝進こむとさし茶袋の側 其川
 池の中居る棉ハ 氷とち 朱阿
 言哉くくしそかよとせさり 平砂
 あり具小あハ暑サを打是進 羊信
 葉るの風乃掃進小飛 百唐

う海津の山々のくまり孔務獨
 殊百つち後せふこ回る
 一拍子あるの通る朝は月
 お撲乃勢古腕を曲れ
 尺もまして指を投込廉の投
 流ちん切束能海へ二日沙
 それく小神のちり乃當りお
 云葉乃褒美勢を改
 既今遠きをある小花花
 花おさる右小桃咲
 有佐 珪琳 祇丞 宋阿 其川 平砂 祇丞 有佐 百唐

芝光無行

今とその彼岸極を志ざれり
 きとるた廿九日 遠道
 かう迷いけ種ふ蝶乃つろひて
 こふ一犬ちん鶏を追
 おレ草乃水の上ふ弓け新
 いそうぬ普語大工お判
 芝光 宋阿 筆端 芝光 宋阿 筆端

ウ 詔の缺と一雨不度 采玉 采玉 采玉

障引まゝ 白やう入 采玉

人買にあう 終る 後る 九本橋 采玉

文字ハ尺之福と 禁断の札 采玉

提筆小書 川口 采玉

虎張は 采玉

歯玉うゝ 采玉

殊う 采玉

さりく 采玉

せめ 采玉

禿と 采玉

ナ 善ふれ やり 采玉

角こ 采玉

る 采玉

生 采玉

地 采玉

市 采玉

此 采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

采玉

その浪より塊たる星月夜
 芝光
 こ味線引乃足を蚊り喰
 手端
 暖簾乃江戸紫ハ右よりれ
 宋阿
 神さし流るる道平路陰る
 芝光
 う後みと砥小民たる煙ノ敷
 手端
 悴に箸扱つゝいゝえせ
 手端
 朝日ハ朝寤をせぬの瘡と成り
 宋阿
 建あともものいろは呼ぶ
 芝光
 師匠筋咲はあゝり花盛
 手端
 苗代水乃日改めく道
 宋阿

詩魯奥刊

汲くをまふ扱ふ 枯樹くら
 詩魯
 日河の池取坂乃苗代
 宋阿
 育の巢にききあふを強よて
 和書
 機嫌れそろ小風車あり
 附風
 つらん月芝居降乃ふきやう
 波山
 ひくくを扱ふ稲妻
 執事

白ふ子くめのこ荒小種乃風

和当

暁くもろく鴨乃 台舟

朱阿

玉高そ月よるるあまを入

附風

馬帽子此紐を志ま添敷西

沾耕

痴のろ人の繪おさへ書安一

波山

上之此也取香乃美山

和当

をいふたういふ嘯 合セ髪

詩魯

二枚屏風取文て仕揚

附風

藤を折茶人の花れおしうさ

波山

稿中くき世身きぬ言

沾耕

京都

梅はくく花をま向や薄い酒

我矢

垣根日すまぬくくひあれ友

宋阿

池持の出路り戻りあみかき

南岫

川波て折所乃夕くれ

井龍

足小羽折るきく木の君れ月涼

田龍

一ツ蓮ひハ吉例乃孫

晏利

ウ 終復してんさ苑き下澄

千扁

守分岩小世城あくれ唐

車香

待ちことうゝ免ふ事とを思ふに

井龍

棕乃葉みく此美し小無理

嘉笑

銅鑊の餌小飽時ハう川さく

兼利

寂光院ハ松明能色

南岫

狩衣ま袖たまぬ秋乃事

車香

屋さきの菊了浩く控重

田龍

さハ二十髪と仕舞ハ書能月

千后

娘う袖もゆす 勅答

井龍

虎の威を足小出さく此乃事

南岫

長谷乃利生に予能凍露

兼利

ナ 加さるましくひよりめくのをは能

嘉笑

誉ぬるそたのし能 藝

車香

う川りや秤小能る人能の月

田龍

跡いと光る縁能屋乃梳

千后

月をさし土俵崩さく麦 畠

井龍

小喜能蠅ハ手助を笑

南岫

豆腐めて林下り巻ひく山

兼利

表ちり瓢盆の音ハや

嘉笑

盗音ちり板又おぬハ書能子

車香

盗こし伽能とほとく大娘

田龍

口をれて又女房此小奇ふー
 戻りハ碎と信を傳を頼
 川向ひきとも下る傳る大欠ひ
 鴛鴦彫乃羽を買ふ事る
 次の君はくくり味極く足味
 面合さく夏となまこり
 曉ハ花小追ハく一掃乃夢
 さ乃白ひも弥生衣文意

千市 井龍 南岫 義利 家笑 車香 田龍 千市

高崎加林亭與行

明星や人ハむく一筋乃みら
 ま云々志もろ一筋乃みら
 棟梁のりされて眠る長宗小て
 拂ふ信く一筋乃みら
 その名も解りて又昔も心月
 毛くもあれもあつひおろり
 あのふも寺侍乃事さくし
 結納あつてあつてあつて人

潭北 宋阿 加林 其旭 素牛 千尺 秀葉 葉秀

初るふはまほひをなる綿荷袴
時而乃多毛隠道てハ出家
又善法他意を振ひ志うそむ
何を吟ふさうひさしぬ姥
暇と志海をかくし朝あけ
忘凡しいさ天宮あうす
炎せぬ裸自憐乃端居月
一日いひお習教を拭
かゝ衣花衣さうりのぬ大師
す云らん切束志温純かゝりく

燕衣羽折へふハ乳の何より
芝折る乳一を皆何ことや
大名乃御神了を尋る庭の松
車軸小車乳馬をぬひ
朝日ハ上下ともしに氷 餅
酒豪をん席しふこは舞尼
皆原をの扱屋も今ハ二三朝
封切くひる年をん扱能久
茶、山をさしふ并ふ高乃梅
麩をんあ底を朝新志月

其旭

加林

千尺

素牛

加林

秀葉

千尺

其他

崇秀

潭北

宋阿

千尺

素牛

崇秀

秀葉

加林

其旭

素牛

秀葉

加林

村鳥翰吹踏出さし 初あじ 加林
 障子をつく迷ひ蜻蛉 其旭
 袖画を筆醫者残り袖壇の 素牛
 五月面暗く鞠の磯下ス 棠秀
 片くハいは失さや 秩火箸 潭北
 二重おそれハ長くなる帯 秀葉
 花お花はくくくくく物狂ひ 千尺
 柳乃佇まハ凡ふ了そ何進 宋阿

この時

吹ぬ日も目おあやの向家柳の南 吾友
 子枝お子の梅 梨子此を夜 宋阿
 郭におあこくひあ乃乳と吞て 文繁
 大工屋根草四季廿お本 水路
 妻船の入夢さし一月此凡 机江
 お撲乃札を乃一出す賣 秀木
 提く刈さくれの舛々女帝花 宋阿
 きくひれん紋ハかこす 文繁

止

十三

仮寐乃健てふとふれをたむ
 口を拘子の利とまをて
 書生よ涼しむるを御殿心
 合羽子と水を抱てけり
 及婦乃とみかへるにほふとて
 世と人誇説文とく海
 去年すむと月尺、座あま巨燈を
 志風さほけ飯をぬる
 じんを腹とて死子のむ衣
 笑乃多き伴勢死正月
 水路
 吾友
 秀木
 楓江
 文繁
 吾友
 宋阿
 秀木

とけてけ氷の波小橋引
 悪くあしきと帰る初孫
 孫る小籠子一書不空する
 産取みくく乳を汁立
 子の筋を足てお性てくつてやる
 袂かから乳母かお
 手此穴はいつこの猫の加よむ
 い月小堀くぬ万日乃換
 あふくて蓮の花咲ゆる油橋
 髪結床へおち方ハ出以
 楓江
 文繁
 吾友
 宋阿
 秀木
 楓江
 文繁
 吾友
 宋阿
 秀木

十三 扱羽織を借りて扱ふ其上
 紫栗貫ふくみや詩^ウむ
 饅焼烟く^ウ迎派まりく
 家質乃細小^ウ心伏の判
 白粉の古ね道く^ウあはし^ウま^ウる^ウ
 句ひ袋に詞合を^ウゆ^ウ
 世嘆ハ告人^ウや^ウい^ウひ^ウて^ウ花^ウの^ウ後^ウ
 心^ウく^ウろ^ウも^ウ代^ウく^ウよ^ウま^ウる^ウる^ウ

扱江 秀木 宋阿 吾友 水路 文紫 秀木 扱江

高崎の花光亭與村

上戸を語りつゝ人よ屋^ウさ^ウく^ウ
 松く抱^ウは^ウく^ウま^ウに^ウ屋^ウ月^ウ
 女^ウ館^ウの^ウ比^ウを^ウ自^ウ然^ウと^ウあ^ウま^ウ加^ウう^ウ
 き^ウみ^ウふ^ウも^ウり^ウふ^ウも^ウり^ウふ^ウも^ウり^ウ
 紙^ウ海^ウの^ウ茶^ウ吞^ウ小^ウあ^ウる^ウ夕^ウ嵐^ウ
 雀^ウの^ウ羽^ウを^ウ川^ウ宿^ウ乃^ウく^ウ道^ウ竹^ウ
 石^ウし^ウな^ウま^ウよ^ウ基^ウ盤^ウの^ウ埃^ウを^ウく^ウら^ウ拂^ウひ^ウ
 箸^ウ小^ウ崩^ウと^ウく^ウ志^ウの^ウ小^ウ鳩^ウ舞^ウ

全序 宋阿 花光 保洲 自樂 玉考 里尺 菜秀

野袴残竿小掛ころ入梅の明々
 うつかりと出づ神を引く
 夷人のまかゝるもすまゝ存ぬ
 四ッおぼれも芝居路の
 帆堀地清て提らる宵月夜
 碇よりみるとハ尺さぬ松虫
 深草に鶉もすす瓢乃勢
 うおしこ口そや豆腐賣さ北
 化粧をいせぬさあのをきりり
 目かやよまきる髪はあやせ

宋阿 全序 玉考 花光 保洲
 自樂 保洲 崇秀 里尺 玉考 保洲

御社小并て提らひ下具
 盗人消く沖城り舟
 糸の勢うらほしあきあり
 大坂へ中相堂連出取
 初旅をまゝ欠て母の灸成させ
 せ城廣く見く咄以駕昇
 清く建ててあはれすく石きん
 お裁踏くくく庵る一炷
 きれいふる和当れ数寄の小柴垣
 男麻乃角の扣く窓能戸

全序 宋阿 花光 自樂
 全序 玉考 保洲 自樂
 花光 自樂

投烟の引かりくさ中よ月 里尺
 瓦むり風乃く後つめり 保河
 花女先定乃亦よこ三人 全序
 墨付くく取鴻乃神 尺
 身の軽よ大上あさくさ登 里尺
 孫を屯しして吹ス打地 玉考
 風呂ぬよ亦く包花乃比 自集
 土かく土くく川懸 紫秀

ふらと花弄亭具切

松鴉や翌日哉あくぬ春の暮 弄春
 花くけつ小雲もたん弓 宋阿
 燕も己う栖を 花裳
 短よ暖帯一面の苦もれ 棠秀
 五人あ三人ふちく月此宿 宋阿
 赤くして乃くさ椒り如 弄春
 くおとも啼ぬ鶏中ん霞く川き 棠秀
 朔日毎く夫婦朝起 花裳

新造の神々落まおるて簀 弄春

歯乃糸襟衣 奪口乃先キ 宋阿

さひし片や名ましく尺の久種 花裳

糸物ゆす糸比良の根おらし 棠秀

九菜小菰の中より子と出し 宋阿

鶏糸糸持陸乃とと 弄春

冷て孔蓮を起し昔か月 棠秀

純立りけそ糸と吞りけ 花裳

村西の向小ハ晴く於麻山 弄春

龍啼て 虹くく乳なり 宋阿

ほこりすみて貫しこの洞 卷若

湯治小やるハ母親志慈想 棠秀

押あへく幸乃糸よ糸糸を 宋阿

手付より唐孔音留 弄春

石灰の洒にくくむ糸をく 棠秀

札はく馬乃まじりあやま糸 花裳

薄者小下法を居移る染屋阿 弄春

寒く糸佛やと糸女房 宋阿

立寄く拾ふ火繩糸燃ゆる 花裳

釣糸いけ糸浪の志津ま 棠秀

上

共

棟上小勢うらうれ、翹乃月 米阿
 きぬ張るゝ乳婦の初風 弄春
 ナウ 鶏爪ナウハ分おちし此植所 棠秀
 奢り者来きり木魚かゝる 谷裳
 杜宇古つおれこの座舗 弄春
 幾小入るゝ蜻蛉 棠阿
 日和てうつゝを削るをれ青 棠秀
 神乃たすをよ来し梅香 花裳

安中あゆ

雲小鳥入日の影や岩はけし 魯白
 何くくはくして思ふ牛飼 宋阿
 春るう川や掃むとほるん 魯白
 餅冷小時を下戸しなうら 魯白
 お碁さる二人の中お交る目 魯白
 何所へ飛や蓮乃実此春 宋阿
 鶯ハ枝の目白小あしきま 魯白
 田舎とく福とも山寺乃樂 魯白

歴くよは才に可通之出入ふ

宋阿

やめめしむる後か中人

魯白

日の教りに戸此浮名六浦てり

宋阿

方乃晴月を待ぬ詠次カカ灯

魯白

市此中や打ひきき習ひふ

宋阿

湖のちりくかん十二 確

魯白

昼寐ふよ此所ふて申うを

宋阿

そころよ成事伊勢へけ出

魯白

月花や比しを頼かむを登り

宋阿

ともに賭る

桑乃勢

魯白

系よ倦角田川原此浦生を

魯白

帰ふ禿子子こし傳

宋阿

心ひけるませる母くる段所

魯白

拵りの札小老をばきしを

宋阿

白面をあしんふか原此中

魯白

肩はり何り家懐れを乃

宋阿

昔妻切小祓あう此をよ比無家

魯白

そなくも里あし出る月

宋阿

貝吹く一取小走る海古小船

魯白

男はくらの志をぬ顔

宋阿

物こそふれりあむつうーさ
 自由うなもぬ洛外社宗
 下結まゝ一二里津の舟且ぬ
 せうくハ無事とめ歌妙葉
 是を欲年の中く行るあま
 う多祓一、新神のほろひ
 名所をよき速哉と欠るを此日記
 旅の支度と概ふく一は歌
 魯白
 宋阿
 百枝
 執筆

松井田三吟

庭鳥の毛、海もぬくち里橋
 陽火高く画小く尺取歌
 幸安切本所子とも喜めよて
 手拭きこ梅の先肩
 造他のおく哉月れてらひるあ
 瓦をくれ、逆地と打音
 碇くとも誰名哉付一火焼鳥
 たの鳥小娘 立す
 宋阿
 洗玉
 潭考
 宋阿
 洗玉

友渡の菜より利匹る幸

潭考

一 秋とまりに糸成さく足ぬ

宋阿

湫淵治乃昔々地きさ家朝阿じ

洗玉

供引は道とく和為建立

潭考

二 日月かくしほを梅をみる

宋阿

畑へ七よほやあふ家初け

洗玉

新代虫鳴芳淋き古物屋

潭考

妻町筋を知つと山内後

宋阿

花戻し反魂丹をや家怪

洗玉

海苔成下とし白きあう

十 常産き男了ふ入麻轉こ

潭考

大炎茶汲てぬし月拭

宋阿

忌中明さく札あう道や呉えする

宋阿

塚序小後才呼出以

洗玉

小くまるが法海紺屋のあは未

潭考

く地あうと至後朝か石

宋阿

鉄漿はあふ楊枝を後小口はれ草

洗玉

縄子の裏よ赤さを能くえ

潭考

加うはへきり込と家角力たそ

宋阿

礼を仕也く月ハこのころ

洗玉

上 北三

膏藥の足ハきぬ小乃菌物 潭考

かさねてきりり一ツ腹より 宋阿

追付^チイヤキ^チ左ハ秩父みら 洗玉

葱を扱^チく枝川小ぬ取 潭考

待^チり^チ基盤小眠る晝衣 宋阿

日ハ山の端にすれり^チそる 潭考

玉^チも其如月のを乃き 洗玉

梅穂^チく^チ免く^チみ^チある^チ 潭考

結珠と吟

山鳩ハ梅乃京談ひろひきり 雁宕

あ上き^チ一苗代忠月 宋阿

きそ^チ扱着押^チふ^チく^チ喜風^チ 潭北

魚^チく^チち^チく^チく^チを^チ湯^チ字^チの^チほ^チ 雁宕

一二あ出して^チも^チ麻と^チ死^チる^チ此^チう^チ 宋阿

自然と尖^チれ^チぬ^チき^チ一^チの^チ意^チ 潭北

炉^チ并^チの^チ日^チち^チ内^チ小^チ居^チれ^チ其^チ外^チ 宋阿

さかや^チと^チ判^チる^チ後^チち^チり^チ止^チ 宋阿

三月五日張子の御教志ありはく

雁宕

夫、欲供り吐しそり

潭北

恋とりよりのおはりし柳橋

宋阿

菜ふありら神子れはそ

雁宕

鶴の越尺こく嶽此月夜

潭小

萩乃紫さそふ柳葉回状

宋阿

いつく小秋此そふ孫氏

雁宕

鼻帛減つたのこまは

潭北

花さの壺所ふ地柳の具

宋阿

顔ほあまき雛乃ほこ

雁宕

うらひあを旅乃奈ハ加るれら

雁宕

日あそまん栄螺蓋持し出ん

潭北

獨坐心二階さひふ靴打

宋阿

えをしたるとんほの夢

雁宕

ゆ六つの花とめくす送り傘

潭北

刈阿さる時口や吸まん

宋阿

菓子色くしの音成ふし

雁宕

左谷様を軽い水ころ

潭北

おのふ立赤かげ乃こま

宋阿

月入りく歌道池乃荒

雁宕

得る小栗此るのうらむる厚

潭北

小鷹のこゝれをし其る凡

宋阿

白鳥乃々朝におとろく芝肴

雁岩

て氣向うのうら拍子ぬきり

雁岩

藤小世をほくへく歌寺乃花

潭北

手拭かすさるるめ此荒

宋阿

つてもなご藤乃洞を新る也

雁岩

さくやふふとくく筒そ久し

潭北

下 鼓

梅咲や赤もらう此あまそ海

凡篁

蝶よりうごく地乃う保不ひ

宋阿

旅羽減茶羅小喜をんあ控く

貞府

槌て拵へ取そき板の角

巴牛

荷下此片肌ぬき一書をん月

言峨

花ひとほくみかい舗乃草

笹舟

小丁稚のうらり出合やち小お撲

宋阿

いし引越も吹寺此御袋

凡篁

利とて一言柔らぬ恋乃山 巴牛

手命失ふ夏恋川凡 貞府

隈とのと詠元と依 社信 笹舟

洒乃唯唯恋志海まゝ恋 言岷

宿下此市云場所を竹恋の立 凡篁

長崎屋あも判燈何里 宋阿

鮎四ささし花の菫残り 巴牛

拙哉尺多り雪ハ癖家 笹舟

昇性も此の小きりあて春恋多 言岷

面障しんとくまそく也 巴牛

惚痴の初ちき一き恋入 貞府

いし子乃ひし小洲ぬも楠 凡篁

陣小ハ梓恋らう泣河そふ 宋阿

常序一鶴掃出れ 言岷

菓子の火残消るし恋一恋歌 笹舟

草尽乃うれ恋面斗尺勢 貞府

姉~~~~いみ子女なり伏尺私 巴牛

反魂丹ハ凡只補ふや一 宋阿

あまの石哉架小情く烟免 凡篁

素袍恋あはる眠る鈴の緒 笹舟

松栢々命ふりりりふ此月 貞府

るみりこる此孰飛こけ 言峨

秋あき流小支敷に粉に糟 毎舟

立流るる秋聲の肩衣 凡篁

鳴原のほつてもや本國寺 宋阿

傘法中うらま心夕照 巴牛

海へくく雲もはかり此神の世 言峨

蜂をちちふと幣乃下札 貞府

中里川岸

枝川乃ふあささーむめ此を 巴梵

巢を出初取かきくこの夢 宋阿

薄羽折あさあぬえと免くえ 言峨

先くもけ小腰取けけり 巴梵

蒲系張しめもよやふ朝日 言峨

柔ふつこまぬ虫心こく 宋阿

う登揚ル鶉衣志練く 言峨

木狭持さう奥へ石取 巴梵

さけ髪のこゆるき——珠散玉 巴梵

夏なまじくくわむされもさる 宋阿

折ることを聖乃泊ハ下死冥 巴梵

けされ時ハ鳴おなる家 巴梵

と柔乃昼るかろき——つこ鹿 巴梵

百との清くんとんの降—— 宋阿

坂のふぶき葉中ハる教鳥居 宋阿

白禿也^{シラカ}郎^{ラウ}找^{ラウ}あう——花 宋阿

花を挽く死中も是ぬあのみ 宋阿

代乃楫ハ何こころる屋—— 巴梵

三味線子娘仲るの下す——と 破月

短^{ミチ}きとまの醫者とるん 巴梵

負^ツまれ血^チのぬ義理もあまてらる 宋阿

茶碗し焼も此行ハるま 破月

又こせは忘の月^{ツキ}なる杜宇 巴梵

津田^{ツジタ}氏と欠く庚^{ツル}の血^チ城 宋阿

そ——^トと杖^{ツチ}て押ハる後^{ノチ}節 破月

井戸の柄杓ハ涼く——ぬ神 巴梵

朝日ハ明るく又付る入代り 宋阿

い——れお交^マ流^リ石^{イシ}所^{トコロ}志^シ鏡 破月

多も古座のみみ此かたなり免
 然れまじハ業をを免
 檜まろハ一日おほく喜阿
 生破ふまゆ花へあはる象
 あり水や人よ馴る亭主振
 何を買ふと自由なる廊
 圓くの連連も川一も花盛
 せ乃せよよも活生ありりり

巴梵
 宋阿
 故琴
 要残
 巴梵
 故琴
 要残
 宋阿

夏宿さこの井
 蓮華院よといふ魚り

先く家もや横ふた市で物流
 年一も年と喜たん年と
 用あの流れもあぬ味あく
 物を加へる丸を四玉本
 追うけてえれと似人荷月夜
 席のそ言此梢吹凡
 本築乃并んであ秋の音
 ころしあく素かん喧嘩始る

喜雀
 宋阿
 夕楼
 古築
 阿推
 岱呂
 佐人
 巴井

髪結め女房の髪餅かみもちの香 楚由

丁稚ちやぢの吐つき吉原きちげんの女め 卜阿

法衣ほつえの衣えもも恙やふふあけあけ胡こ吐つ 巴章

桂けいの按摩あんま言ことををふふむむ 佐人

善法ぜんぽうして其その疾やまひれれぬぬ而をふふさ 古策

あ~~~~~あ踏ふみをを呪のろみみ 喜雀

振ふる着がハハ取と化け小こ初はつるるむむ乃の山やま 楚由

乳ちち母ははりり方かたへへやや近ちかのの巢すだま 文楼

駕か屋やろろやや子こ移うつるる一一銀ぎん月げつ 巴井

猿さるよりより也やをを風かぜ呂ろちちのの梅うめ 阿推

十 欲ほ心の化粧けしょうしし捨すけけ老らう乃の波なみ 岱呂

いいああとと禿かぶ小こああぬぬ小こ坊ぼう主しゅ 巴素

家いへよりよりとと後のちるる足あしせせふふせせ片かた日ひ新あらた 卜阿

虚うそ言ことををととりりめめ勢せい枚まいのの大だい木ぼく 古策

とと此こゝ供たてハハ醫い師しのの胡こ麻まととととまま立た 喜雀

言ことをを急いそぐぐ一一くく目め川がわ忌い進しん 楚由

縫ぬい針はりへへ子このの這はひひくく糸いと何なにととれれ也や 阿推

扇あふぎ風かぜ破やぶささくくいい付つけ乃の女めやや 巴井

出でかかくくいい衣え佛ぶつををるるとと後のち汁じゆ 卜阿

去こ年ねんふふりりにに吉きち田でんくく桑そう 岱呂

丸山も人志りくある宵乃月 巴章
 近るも世は秋そゆくなり 佐人
 ち
 るより小鳥の祈りよ行くらん 久持
 六百巻了障子ひりつ 阿推
 鼻命哉こつよおころ小笠原 長雀
 山靜ある 虹の夕ぐれ ト阿
 哥よあ歌名よよをを敷へん 古築
 けりきたる二月に鐘 岱呂

遠忌独吟

晋子々芳塾の佳句も長き
 ひしかりれ古木とい
 ならぬ

抱付く人れハ雲井のほろ良哉 阿推
 峯小塵おく流連と乱言 宋阿
 蛙啼ぬ日こそあく乃昼おれや 阿推
 枕引ふりたこもこい
 武士志辛く城うちへ菱板
 磯の芥をほき出せハ月

ウ
 輕虎の夢へひいやりと今朝此家
 全銀すく先章乃吃山家山
 蠅うらハ具見此伯父の拍子利キ
 此取を妹、寐ぬハよくく
 彩佛の首ハ庄家此 大鏡
 後女こそされとま祢く廻持
 降ル幸ハ東鑑も多うく
 地うへひ海く元の小石物
 猿沢下踏下けお紫 氷ル月
 帰らむらく人參乃売

湯の加減よいとく続哉あり但
 そ乃扇そそくやヤでんがく
 先陰よ追造くおく 名く形
 若く代を淋し影中ん全キ年
 未ホく久そく居ハ家密坊
 へくふ誠の乃うくうふひなは
 名の少里交承を家此さみされ
 鐘撞ハ融毛洞う入おの
 職人尻ッ食ハ 跨 妙

子角方の桜まきそまき祢ら事
 魂乃りりり少々うま子城地
 美う此合を月忠唯能里
 女節ちうそそくく母何李
 悪うまう果る相氣とあれ夜
 幼るも戻りあけりて態熱
 耳曳少やあそ双六うらむう
 きうさ良白ハおきり一書
 ちういふと見つけるもの名白髪
 柳小秘樹流くあ 乙名

諸国任玉末 順混雑 京

月花や日む小まハ瓜舌忠先 畔石
 けあらの枯木りむ此涼そり 南岫
 白梅やむの初咲あかみ 鉄士
 かよまふ花枝乃光や梅の月 東明
 香匂ひうりそや代この梅此世 盛澄
 日小信くそ工も白ふや梅乃音 英利
 不ろは神成何と希のう免のそ 千市
 古乃や出まハと此不乃花 百李
 名と久し降た二月の白し式 一方

ちろ梅の流を汲や荷ひ桶 舊夕
 若柳の肩に伝まらぬもめ代 几圭
 摺臺と梅うらひきむうの糸 子雲
 なげくふらふきハ流く梅のむ 可焉
 山ふよやもと来一乃の風に音 馮川
 口は解る人七志何ぞ柳の南 胡三
 志とよ一梅極小 孟忠孝
 面六句
 くり又一也世故忘あをいささく 居人
 流小とまふ 蝶乃 居眠 宋阿

野海山海打赤ころりふ百千鳥 富珍
 市場く此娘ハ 居人
 別荘の薨小月や残を〜ん 菊利
 孤葉をぬ本を誦んえたり 執筆
 娘小やむうを今ふ花び〜る 宋里
 雲凡やくれり清ハ雲此 風 波光
 哀傷の余情校了りして 陸奥次ノ川
 寸志を演る乃指抽如左 晋流
 布施うらよ神乃余りや落此 莖 上列高岸
 鶯の暖ふらきぬを〜の 水徳

照彼岸 西小雲 重花の 依 秀木
 尺ぬ人の 伴母 一梅 一の 中 昔友
 征の 音や 彼者 此うら 此朝 朝 至考
 梅の 香 此家 かい 伝くろ 上 切 三 保例
 咲む ちん 新も びうー の 鳴 一の 形 花光
 ちろ ちや 蝶を 抱く ち 井 まで 楓江
 む ちや せら ね ます 進と くれ の 不 千尺
 蓮の 根 此 其 以 ち くり 雲 乃 而 妙笑 泡 水
 線 香 不 其 新 と 一 一 猶 月 全 寫
 傘 伝 一 一 ぬ せ ぬ ち の ち 喜 此 而 阮 舟

枝 ぶ け 一 一 卒 劫 婆 の 復 け 不 喜 水
 み ぐ ち り 子 の 梅 一 一 ち 向 や 里 行 ぶ 岩 桂

行 ぬ 此 雑 談 集 や ち ち ち 一 一 潭 考
 翅 ぐ ち り 一 一 ち 翅 ち や ぶ ち 雀 哉 洗 玉

松井田

言の 葉ハ 皆 口 小 あり ち ち 加 け 尾 陽 列
 友 人 此 半 而 ち ち 一 一 一 野 列 島 斟 斗
 梅 咲 や 常 ち ち ち ち 一 一 一 下 館 毎 舟
 う ち ち ち ち 一 一 一 一 一 一 兼 中

美人の顔ハス〜
猶月 冥宿さる井 文楼

りあやもふ清ゆく昔海の味 巴井

花の高ふ免さハ社や左りあへ 長雀

そ魂乃も向ふいさ 仙臺 波山

瓜子の白きを尺せぬ好き哉 落合 祇考

ひ是より川馬 ああそい 百貫

唐湯とも鳴や日南此蛙の子、宋峨

振袖乃々立さぬし 蕪沼 巴呂

梅のむこほさぬ 中河岸 高城

初午や草履の尻孔去年返り、理乃

山吹や冬尺〜谷を埋りぬ 上列大間 白東

ちりさハ ち 椿ふる〜 サ 一物 指东

ま〜ひや つれ 初瀬山 林胡

清とほく ね 人七 れ 月 本露

箒 木月ハ 凡 の付と 取 柳子 加竹

入おふち ち 昔も あ ち や ち さ 哉 文水

乃 廣く 汲 や 一 河乃 玉 椿 阿波 秋江

志〜 ふ ち あ 乃 あ ち の ち 雀 哉、山紫

照跡る月小乳のほろろ子、江岸
跡音のひより照屯や学れ寔、西地
そこのも志してよる乃さく式、芦爪

東都運速明昆雜

ちる花ハ地尻くもり垣の桃 午寂

晋子りま一昔やあはれこいひ合
さ小文なとるふくちくせし
アハつくここのむいし

反古さへとハ跡も春乃厂 卜宅

物事ぬれりたれと父と
あつはつまは

子んよ惜うるり風のむ 竿性

世小崎やま雪の引跡り 桃溪

お師のき思をおもいそ

押巻のかく、白たけ梅はくく 詞言

むうが今足るよう小 繼新 詞言

功徳而道三十三回、まの面 立圃

々ハむう一巻も衣乃一巻式 陶巾

梅古世小捨ぬ香くゆ程の花 了因

極糸の便さくや 彼存 陸 立梅

花多おとハたや世に物くこ里 南郎

角とれく麻やも法のことこあり 三盛

春るや傘と名はかや場 町 路と
 年、経る枝ふりあり一 桃のふ 未白
 白帝小の向のあやほくくし 沙文
 猫のまゝ細工に化の接木哉 故一
 伎保姫の綿と足平乃木末多 河通
 二月やる雪とつ乃花くくん 巴文
 なりくくやうてま斗此山はくく 魯酒
 み梅やととも日あり谷中乃 訥子
 云与れや名もまよ山の朝かけ 嵐竹
 情くくも名や流ら 言此山 三壺

誰の唐さくくちる日此桑のふ里 左文
 を此この梅ハ世を造り乃の兄 兼風
 伊や花よつく交くれをくく 赤鯉
 名のくくきく流りくく流るさくく 喬水
 ぬるくくけあよ流るやけ乃味 文里
 香ハ梅うかく花ハ根小戻りも 静泉
 こそ人のま向乃吟や花くく乃 百太
 名芝乃しといぬさくりもの友 扇兄
 二月や餅の柳をん一葉はく 百卷

お宿のむくくなつく

詠さして神さるる寐ぬそ暮乃夏 笠翁

懷壺

いて其比對の珊瑚珠江戸街々々 夏哉
 うくしあいの夢をふく川乃文字飾り 有佐
 梅花ちりそや詠乃は子持 祇丞
 雉子くもりまぬ夢うきく山 守端
 風中浄土の喜能夕この南 其川
 明星を今小月尚やさくさ 平砂

去御方より

石馬路くりに事

免され来る事

晋子

白雲や花も成り散ら 暖縁
 氷もかきみ其流 逆 汲 宋阿
 雪の家此住ぬ冬のとれとを
 ほくし様と家 庭 中 泥
 じく起小月ともくそ旅掃笥
 くりとをし一何と家初秋の音

此が乃桂一糸糸ハ下色みら
 飯を焚く書物ひろける
 四子本の傘ハこれ信なく
 離るる切を志すぬ挨拶
 木より言ふある鳥の夢
 吾を寐るる又奉加 永持
 流の叔父向く奥母て髪しほし
 出持てし巻糸巻る伴を
 萱草取好むかこの物とす
 前水と磬をぬく板され

右神楽月乃乃るる日新町
 狐巻さめるる巻糸教入
 秋子の位懐かくやよこ二節
 いさくひきぬお惚の果
 う地子小娘る蒔絵乃古らぬ
 讀誦仕込ハ昼ふなりりり
 物小切乃ふ道は了そ字活さハ
 物瓶の音志 寄く止去
 役人けすいと并こすむのつ
 御能三あるは〜と海

ぬすむる月まきのほろ松れ香
 又志てこいせ市此ゆつり紫
 まんらうと六十喰し息はこい
 あまり笈あそ細あがう
 奥中あらうそくハ先中二階
 系このあはしは息をかくせろ
 朝夕小遠ふア各ハくせりし
 酒へうけと取虹乃あつさ
 桃はらう中ふ翁れ氣言よ
 枝葉くらひくりあこころを

かゝる
いふ

も
ろ
ろ
ろ
ろ

右

吾中菴を嵐雪又嵐亭治ゆ
るもつらう芭蕉のめも事にて
白とあつらひせしむと編り短と
延くもつらうかこ女半をい得
海も妙もなつらう生涯殆ど平
紙と書と喪をうらふ雪中庵
と信し事黄檗木乃信れと
押しつらう菌すはらひ痔漏
れも平世と辞をり平世年
より老ふつらう膠漆の交

下

一

を修つて二十余の既工を異ふ
一死と傷に寸と惜しむ
志終るまゝのゆかりのこゝろを
白駒階をくすくすつらむれとく
けしきと二十三日よりな
ぬむらや 宋所をき津島より
志百あくかの泉隈と歴をへ
白と度して白とあつた
一本とぬや 聖徳の今表
老毛昧と帝をねて白とある

とぬら 幸ぬを今此昔
とゆら 類平昔をわらふ
とぬら 白とぬ侍

二十一日

おの下のつら

ぬら

茶

濱町の草菴は一ニ丈

阿婆里の老木の柳有

古の主人をくまの里の川

一はる往來の記念も

見侍らるる古まきつ川の

川と頼む川ちりちむ

跡もあふ一柳の句もな

人曰く阿婆里とあるは

阿婆里

伊の柳をえりや高ふもり

声なく川よおれ氷雪

家濂の初な夕るよきておろ

酒のさりれそ草黄む

省明の吹のちるそ枝

れよろろれ終を感す原

泣川や楫もよ一く五六艘

歌く声よつ連く歌く

宋阿

解糸

笠翁

我兄

卜宅

桃溪

篁往

宋阿

黒髪を夜明の雪の待上臈

解糸

あつくくくく用のなきみ

笠翁

姐板よありありけり牡丹

桃溪

雲井の初言虹とつきぬく

ト宅

石壇に汗足りけり草鞋とく

宋阿

手拭りあり新采の埃

解糸

私の孫抱世四五人月と見え笠翁

笠翁

う〜〜と響ハ氷寒〜る

簀往

花のとく〜御室ハ庭〜東山

ト宅

集飯と自ふ若芝の露

我兄

東と希馬士との水々雑を賞

濟通

娘に相打ちなる業代

水堤

何れも水の自由の能可

宋阿

木魚打けりそりくと出

全

ふむと云はつゝおと女子も

我兄

去のこの神とあふ清也

今

葦笠の掛かき拂か勝軍

濟通

燈籠あけりよりの世立

今

下瘡のやま一夢十三夜

水堤

大夢言く人家くくく

全

道端の瓢とまきいも食出

簀往

観音のふりまふよきまらひ

济通

下はまらりまき三年のまられ

卜宅

伊香保の馬のせり取

解糸

越原往へ通ひの外のうら

笠前

絵

絵と糸と千分目目張

宋阿

人のり危せり揃くおの幕

我兄

かろりいさひ生まら

執筆

松は耕菴興り

春川一三十棒のふる頭巾

青我

雪の栢まきおまらふ

宋阿

辛筥の物提さやまら

柯木

田のエ又ふも頬杖

未白

川そひ耳簪の跡ひら暮の月

芝光

秋吹らと秋風のうら原

随意

賄るる角もあふの壑の壁

宋阿

不二とこころの地持もむ

青峨

下

五

樽酒の蒸とくるれく淋くま
 目ちあへん裁板の米
 床起る母の左と居る可
 笈書のうちのみうけ
 豆の月あまもきり
 駕そ角力と運る四の宮
 鯛や吐頭の家も焚付
 曇る時を鐘狂ふる星
 猩々一木の花と踏ふ以
 浮世に到る寺の書色

未白
 柯木
 随意
 芝光
 青岷
 宋阿
 柯木
 随意
 芝光
 青岷

長竿を習ふ中を猫の然
 新つに舞の曲やうり子
 男伊達りさあは義理と骨と打
 ありれと笑く扣く三味線
 夏歌や蚕の小舟へ颯と見る
 り者の足込入へ履きぬ
 折形も流石源氏の烏帽子
 花もこころき鉢のあ
 音高し猪手笛をき斗炭
 三つ刻む友童の赤

芝光
 青岷
 宋阿
 柯木
 随意
 芝光
 未白

揚土の鉄と海くと有明と 柯木

手命子けきこ入妻ぬる葉 宋阿

さあぐま取と種のを蕎麦俵 青岷

緑このちんちん蓑草の音 随意

あさきー末ぬ日ハすいと何れ世に 宋阿

うとと下りぬも腰と侍 柯木

黄壁ハ布袋と葺の言入口 赤白

やうききし初ぬ中日の空 芝光

文里奥り

かへ吹月のわくや 枯柳 文里

誰任宿そ新のち川流 宋阿

大判ハ小判より又つめとくく 静泉

今日ハ状日ウ墨摺と枯葉 丹子

千々阿る筆を小張の地牛 呉来

花さうがし根をつきとる 草

苔あろも杖もたるとく 浦抜垣 丹子

詠るるの声のうもぬ 三海 文里

拔と吸く糸を引ぬる窓の内 呉来

漏と悪くの言中を 静泉

神垣や十日阿婆のせら 文里

夕の夏のうらむ手ま 冊子

傍咳の雪のうらむき鑑のぬ 静泉

雪まゝの嵐のうけぬ玉棚 呉来

三階の二階禮をぬの月 冊子

あやうきの梅を指く三味線 文里

花の川印燈鬼灯を立並 呉来

梅の朝日を雪にとふく 静泉

穴をさく鉈はふ性を見く 文里

布中を抜く呼く六つ 冊子

丸合羽裾へぬけぬの卯辰 静泉

病みの耳をふさぐり道 呉来

悪の如く硯の海にすこへ 冊子

電燈のふらんまの事 文里

阿やめぬ蛸売やの子代や 呉来

もと里車と儒伴おけ 冊子

大佛の影の下をぬるちき 文里

年の油を語る 呉来

月をくし物たり市にや王^は子
 旅人るく聖の市立
 世^り居りる正正のまらや、さ
 廟に文を又新しき
 君、代やさく汁のさやま
 花さきそちの撮もさうの
 蛙鳴机のう一の夕あし
 人のさちあまはうの
 都泉
 文里
 丹子
 都泉
 丹子
 丹子
 都泉
 都泉

三吟 解系興り

枯柳ひくしき親の友
 新場かろぬあゝの呉^舟
 山あのをれの末の垣やまろ
 庚子、横、強、鼻、唄
 雪月夜回蹴のちを折そく
 ありあさよるまのこやいあ葉
 原あし子共角カコ季そよ
 志ぬきみこと借と錢つく
 解系
 宋阿
 少川
 系
 阿
 川
 系
 阿

鵜田の上立賣ハ赤古
 石燈籠ハ赤を西ひを
 酒の月の紅ひハ赤と云
 早留川出ル琴の横魚
 傘のしりのととといひり
 小箕つりし江戸橋の巻
 吹、狂の百葉庭ハ秋の声
 枕やむ磨の膝ハ赤月
 妻の夜のほろハ赤花のつ
 城をカハ赤菜さのま

川 阿 糸 川 阿 糸 川 阿 糸 川

来、けの浪ハ追赤ハ投頭中
 横を著る君ハ赤浦さ
 ぼくみ川をくま口へいれ
 餅春の湯とりろハ赤水
 赤ひと川奥ハ赤構ハ赤草の庵
 石を押しハ赤茶を干ス
 采船ハ赤いおハ赤羽日山
 切と女ハ赤田ハ赤若夜
 掬先ハ赤口ハ赤さる實うつ
 友ヤヤ赤鐘をく鳴

川 糸 河 川 糸 河 川 糸 河 川

河骨の冬もさすぬ月白雪
 多君を抱く真踏すり花
 鶏の進まそま入路のうへ
 肩のいそ橋の車を押さる
 天窓へあそぶ大粒の雨
 此の代に世の跡踏舞の山
 さぐらあそび松ハ舞ふる
 河川、糸、河、糸、河、糸

魯澗真行

雪飛んそ雪の枯枝の跡青—— 魯澗
 石落の葉ひくる暮の花房 宋阿
 ものとも主い旅のぬま—— 少我
 柱の筵 吹まぬ、 蘆筆
 浪のそこのゆるさそ也—— 秋の月 雪尾
 きぬとをわ池へゆつる小夜中 三壺
 六切川歎袖みりや田舎海 嵐竹
 一首おぼけそ書ちそにみ 来国

下

下

る川燕の言、海有々也十二銅 左文

何いそくらむを騎の供 少家

玄関まろく且夕の舟も暑 宋阿

目錄帝の表平 俗置 暮洞

二荒と能見て来たる細工人 蓋争

月代剃とまハまけ 七夕 荒味

猪口ひと津山りはく有 水の月 三壺

和尚極まると生の浦梨 吹きて

妙、鼻の糊よへくを蘇古呂毛 来因

雞の弛走よ多き貝壳 左文

⁺ 出、ハ上のありぬる為よとあつるを ぢふ

喰々ろ見とせ仲又の面 宋河

ふ雨と塔の毎よむりやま 嵐外

あ日通とる葉 取ク草 来因

駕果の謎もの己人の身あき人 左文

年と越まろく預り 櫛 蓋争

踏破のくろま 帝よ 觀也 雪尾

時よあふさかいありぬ 寸占 荒外

君風呂と平 芭屏風の采あつふ 魯洞

隠指と二人 けり 食時 三壺

白露と三河とよ津葉の竹の月 笠箏
 毛見の志しせの通れ物看 雲尾
 ありとる坊車よすれハ麻ハ飛 宋河
 可作操指く禿いましめ 魯洞
 吳鬢よふ髪まのりあり立姿 桑田
 土圭仕りけり雨をを見る 三壺
 桂ゆき葺の真首取戸を 左文
 籙の胡坐も若芝の上 少系

宋河興り

海流るの橋ハおそし 霜時雨 雪尾
 似引形りさ芦ハ枯却 宰鳥
 穂古矢此十三歳をくくらあろく 宋河
 豆智を足れを配上まぬ大 少我
 暮く秋霜をのそけこつけの月 宰智
 大なる石の露を川にらるる 雪尾
 山ひこし團扇をあげ秋西のく 少系
 古事々と宵中つくと国者 宋河

小草菊を是眼もくれ花かみ病 雪を

卯月のかみ里所の塗笠 宰智

如意の嶽女子ハ故事も雪ハまる 宋阿

喧嘩のお手是物とゝある 少歌

青貝の蒸籠一川や記りら屋 宰智

唾頭の自刺不血儀てはる ゆきと

て川花や手向のおまを提くる 少歌

空ふく井コきれをたれ中 宋阿

十日の宇治の人ら月 雪と

草履のメを切て投歩 宰智

⁺ 舞臺の川々きりの昔の歌 宋阿

小つひ懐の役ハありと 少歌

糸屑の隠ぬとるに静し 宰智

牛馬の影ハ七つよりあ 雪庵

辛りの業枳場へ通ふかんお智 少歌

阿きへ後向くまんごび 宋阿

ろわを主まのわいあまを早馬了 雪庵

帝ハお葉を包む枳枳 宰智

阿蘇の山阿蘇の山阿蘇 宋阿

一人の母をのちハ 雪庵 少歌

奉公の名はありあきおろしあけ 宰智
 抗と西のきつりやきき 四きを
 者病の葉の市つく朝嵐 少家
 持をつきくさや桶の供 宋河
 うはらの顔をせうまき胡粉とく 雪尾
 笈のふらん 臺とふりえ 少我
 一家中花なき朝とゆり 宰智
 四なり、そのきききき 宰

百太典

枯くく雪を花を柳、取 百太
 舟の巨燈の供、刻 宋河
 賣昆毘の小風呂 浦く櫛、出 故一
 木をさきうあく 松辺の内 宰鳥
 一羽の響の腹見おる 春の月 誦子
 ひ、里くと太刀の奥 執事
 角カ宿いん家の遠 宋河
 宮の金具のえり 百太

長風クラカミよりおわれぬ松葉の横河り 幸智
 鞘カサの傍に一はるおの人 如一
 前帯ハハ欠おはれ時を抱上る 如子
 占ひ下の子は清平を河る 宋阿
 昆蟲の腹を付るお切心 百太
 つやこく輝る花の玉水 幸智
 来る子と口を明合ひて 如一
 請人よめい古りまりぬ 如子
 とりへ望む西へ五所の曉日 宋阿
 火強をなけぬ午の鼻了 百太

親分と白ひくきれき辛おお 幸智
 二度めの外科の来ると 如一
 やうやうい蟬一とまきとありぬ 如子
 川原のやげぬ六月の四 宋阿
 殿書彌馬ト祠のあきろく 百太
 りぬあきんの女りと心 如子
 千歳ハ聲もあときき男おと 如一
 りさめを喰盆の草花 幸智
 舟引の豆もあきろく縮て拭 宋阿
 柱へ来ぬと皆る三日月 百太

ほ光く嵐のよまは風の音 宰智

所儀りけりてるまて七市業子

押し込める腕のありぬる花の川は 宋阿

苑んとの聲の壺はさりとる 宰智

阿ら、桶は斤袖の川を流すありき 故一

著るのこの山のありぬ目の癖は 百太

みとま子の心を抱く心をひ 初子

氏は阿らまりとる 拾世垢を離す 故一

陸城 素順奥り

舟へ吹ぬ柳は枯る年と経ぬ素順

川はよるあらく十月の草は 宋阿

世は馬の河をこのとる櫛らんて 雁宕

鎌は傳へ頭けをりとる 吞英

樹のこのまをれを有明の園子と 安汁

飛り桂と欽若とる雞頭 田定

苦勞みをぬる高人のぬまの秋は 鶴見

くくろう向きくく笑ふ門立 朱滴

志きしと一長持の礼配

大羽

波阜を見とるは松の下

東宇

武士の自身まき出しを趣

西奥

高坐をいそぎし事云

あけ

穰ふくひよこの落着海を水

朱滴

股引をいしておふ下地子

尸宕

法あるもの盃先を貯る御藏

田光

柔湯と同じく異見吞の

素順

名はれ人君もあきとの家の葺

必羽

蛙の胸ハとろろとる

鶴見

雉子よとえへりしに桂船

東宇

祝詞とせうむ老のりの吟

西魚

手濃く桂のゆれを草の菴

あけ

とれと啼やら雪の雪に

朱滴

板橋をやうて踏打富翁を

素順

あきの酒年繩と吐貴

田光

腕まろを滑り艾の一はみ

鶴見

温泉の鉄物の清涼條系

必羽

あまへくはむ雨の垣依

吞魚

所れ高佛のひとを鼻りむ

東宇

宵寐ある大工の弟子の十三夜 朱滿
 こそ破れぬもの酒席し 阿汁
 四先神とて五丁茶を痛く 田定
 釘よりこりり下判の燐 素明
 髪結の盃よりほろ光あし 文羽
 鳥賊はふるさとあり思ふ事 能児
 四五日とりか日と待たず毒薬 宋河
 見たりぬもの人あらの山吹 东宇

独吟

室咲よ春こそかまの苞飯豆 潭北
 小春うらうらも春の場火
 ふりくみ猪の子のまろや
 雲のくへく 兵服屋と待
 雲よきまろ 穀と定ぬ 盃の月
 身のもりよさハ 未の炊りふ
 踏るくし 瀬田 中島 予の花
 きー 春み 川へ 云 ちれものり

肩の向けよこをけぬまの衣
占ひおとほし火を増
雷の鳴ぬ先く高まる
飯をまくらう喰く大力
浴よる鐘のせぬ潮引
檜岡屋の庭の雨くぬ
代待の何とくいのせぬ脆月
春の煙担の架と尋ん
山人のふくま来く毒の雲
虫よ食たれく柱ひさくふ

此後も交代船の所跡ナ
棄取菓子のおくまきく
偶々年衣のぬめお階子
蘿苔よ何るや志れ貝
山、はるくめくを時鳥
猿、盗むくおほし酒め
餘半よ浪りちけぬ湯洗ひ
さびく通る侍の籠
まぬくま跡のまぬく追つきて
おぼろのあぬぬく袖喚ぶ襟

夕月日盪のふを飲む鳥
 女郎の字の数の左に道
 真二ひりりてあんにやうを
 電拂ひみ。この埃の中
 名はあゝ高根解く川の幅
 米といやうに旅の管

仲井川各典

十月や共ふるとれ名に枯以 阿推
 種とくさひよ雲の朝、本 宋阿
 出船の跡もみあるとい 巴井
 財布と投ね姐板の旦 巴章
 有明の余あゝとと譽つて 佐人
 祈か京の余も確々あれ 楚由
 若及と日して窓の勢時 文樓
 澄りて川吹、危の常目 古築

下

世

見らざるの其身ハ、親年打まる也 成呂
 うさ子あゝあゝ、兼月の亦 喜雀
 衣張の境の垣ハ、まゝ越へト 阿
 ひとるゝ、素々牛の皆と掃 阿推
 不ろ酔てわくる追ゆれ夕月夜 楚由
 汗手拭のちめを、山の湯 佐人
 何くくと君風呂出れ亦坊主 巴章
 高ひ返事ハ、家の懐い見 文樓
 土手仲宵花と集る鯨岐 成呂
 草芽ハ、ま鳥の摺鉢 巴井

剃立へすゝれと下り春の風 喜雀
 桑のせく時、草と借るれ ト阿
 雷、来ぬと恨むハ、先ハ、毒理 古策
 祢宜の玄関の校ふ取つき 成呂
 鶏の障子ハ、あまれ 巴井
 小間ハ、賣ハ、井ハ、くくハ、 巴章
 亦来んと湯女の皆と撫ぐ立 文樓
 占と見と、まれハ、用ハ、専 喜雀
 福後と待あかせとる十三夜 古策
 とれと問ふても、菜の先生 楚由

下

下

茸持の籠に居る松の志
 書せし見れは仙臺の啞
 討^ウ取の位牌を奪き二三
 狂言崩走 飯の追焚
 寐せぬ子年 嘲の片隅 初上天
 硯の繩の通る又来る
 枝^コを杖つく 暮の咲きし
 茂り、流るる 津、山ふに
 佐人 阿推 卜阿 基由 文樓 仿人 巴章 巴井

中里川名興の

伊の世話をし 男や枯尾花
 山に見すも 休る津雲
 あり叩く響の音 日ハけ
 重い財布と腕にふる
 霧晴るをいよ 通^(通)鳴
 志れし 志あふの 三日
 萩のこゑすけあふ上 葉干
 返事と取ると 主ふらふら
 徳考 宋阿 露城 理得 百貫 巴呂 宋崎 久房

下

世三

唇波もあやふさふさの都者 巴 甕
 呼まきくしを小儒つき出さ 宋 城
 暮るまきくしを小儒つき出さ 宋 何
 火鉢の跡、蒼木の売 百 妙
 須戸寺、雨、青葉の存是く 陸 河
 駄賃 極 極 公の左 祇 考
 葵置の直宮りけく二日月 文 座
 雀の家と高きつら〜 宋 家
 角のの帯百中花さる中 百 妙
 蕨、つら〜類くふら〜中 巴 甕

釣船の身、海〜 巴 呂
 注は強〜ある道〜の石 理 得
 杏の戸、河津他、見〜炭瓢 杏 塚
 時のこよ袋〜の〜 文 座
 知番の面と〜〜占筮 祇 考
 引河の月、味〜酒豆腐 宋 城
 舌子、茶〜の〜 百 妙
 角羅と大工の目〜糸 巴 呂
 瓦とり〜〜〜食 高 珠

葉物へ黄のこゝろ風車
 又花
 並わ有るうゝおまほ神
 采翁
 拍子木の音と三波り通し後
 云ぬ
 いけぬ強の古の海よと誓
 祇考
 見ろらちよ帆と走るは雲の雲
 家城
 ちやんと陸の林木のうへ
 采翁
 ちまうる育るゝ花の十文字
 理得
 町うゝひりる家この雛
 巴呂

本井田善美菴興り

鶴ハ味て子をたれちるや夜身了
 周道
 暮りまゝく年壁と杖うふ
 采阿
 芦陸金一ち雨とあささこ
 好徳
 羽折の裾の袖もさるる里
 潭考
 枝折み朧をほいゝ松の月
 千之
 り 笑ぬりやー草の外垣
 洗玉
 機織の言所へ寝る出合宿
 梅童
 都の伊達ハ寸つゝ不宣

筆の直ぐか流日筆

香居の額年空酒とあり

生里黄楊すいと二間の奥ゆ

世傾坂ハ三つて年ふる

待るの風外とるのまは船とる

鳥猪さくまのく有下駄

雲とらふまのよる明の月

一夜中ゆまの條とる名

こけとるまのけりく世結の御連繩

町出とるまの蛙ふるる

宋阿

水徳

潭考

周乃

洗玉

千之

不宣

梅童

子之

宋阿

生^ナ破のニす一乃上書のリセ

ちと世と換ぬ尼の乍筆

月うの波とるの格子の煙はけ

立ち食喰ふかききりう南

明日のぬ軍兵とる此大精奕

冊のうさう産神の土

又ハと落しありる夜の道

馬のうさうれそ鳴る口

夷講首とる化粧阿茶

窟ん石て墨とる

周乃

好徳

梅童

子之

不宣

由道

好徳

梅童

月乃

不宣

尊々茶平船ハ近々舟の月 梅童
 晒の印のありけ平立 潭考
 被衣もあそこの魚とがらん笠 子之
 帝の衾 油占の家 好徳
 拙小日 報治の小海の川 宋阿
 ありく川 茶のまじり合 洗王
 二人あ三人ハ又甘藷さくらを 不宣
 苦くともあり 薪のくさ草 柳童

題臘ハ 去井田 潭考典リ

明星や浮世と羨の跡 宋阿
 是く酒子 雪の枯芦 兼中
 面楫の声ハ 位 陶
 笑の戸 斎のク 如竹
 盃のひらき そのふ 揚 列市
 ありさそ 疾と出 岳夫
 ちりえ 衣の川 撞木 山根
 医者よ 今ハ 生 丑井

傾塔と多れぬ先古らまきと
 白をくみくきの手と見せ
 夕立のつれぬあつぬ茄子
 かけりりる雪踏を也
 餅さし竿さすもて招火打
 着つるさるる京中の堂
 霜の月あふくし所屋連縄
 一本のあしと引さけ
 名前の花のゆたあき四谷口
 付子のさきの曉と出る
 卜肩
 里北
 如舟
 刈甫
 兼中
 陶
 出丈
 仙机
 五井
 卜面

鐘ナもむ本因坊くく日とすれ
 このと四脚神帝着るる
 呈考二年喰娘立く連
 床生れ、帯とゆり
 おんあくと糸よる細く細く新
 こつうけくし生酔の蘇
 無頭の袂あうまきる春の雪
 うは、と来く御衣向一位
 紅毛ゆあ石垣年口を
 床より鳥几中よとさる、
 里心
 如舟
 陶
 兼中
 如舟
 岳夫
 卜面
 五井
 刈甫
 陶
 陶

示

共

見よつゝ梯をさるる曉月
 長ひまろつと三人、すれ
 神木ものの賣ともう下マ、み
 隠倉とを業今ハすくゑふ
 系りけの半弓ハ世のりまじ
 日新續く一夜雨降
 室敷の尋ふ事くそ毒の滝
 山ト矢ハこたへて西谷
 兼中
 里山
 岳丈
 ト初
 丑井
 宋阿
 仙杖
 刻由

高崎 秀木與リ

大川雪や雪コトあて星月夜
 頼ハクソゆも抱ふ水雪
 山々の隈ハひも太刀佩て
 土産の火縄盆借と出賣
 夕魚の埃の中よるをふく咲
 なまきふり暑一日巻の風
 三〇〇も時早し通れを鳥石
 湯治の供の小僧文裁
 宋阿
 秀木
 水徳
 宋之
 楓江
 宋阿
 秀木
 有徳

下

下

帝奥ち娘の百人首

宋之

重目ふた時筭ハぬけ

楓江

臘梅とれぬととる婦人

宋阿

切落しと古隠居一口

香木

あり下谷洲草田向院

水徳

公雨と見合と曲鞠

宋之

指さぬみと主人へ奉る

楓江

妻まゝと美く侍るの月

宋阿

順流の急原歌く井出流

宋之

水ははくく水流と水徳

水徳

手習子廿五日のこたうれ馬

香木

凡呂浦けく包む鳥籠

楓江

非番りと向と回く宿嫌ひ

宋阿

中着尻へまのれ下草

宋之

中坐の研とる里と鉦の声

水徳

女板まゝと糊膏り来れ

香木

汗拭借ととゆハ元道事

楓江

豆の橋船の人ハ吹とる

宋阿

琴の糸まゝと仕廻り夜食出を

宋之

臨とと大と大り来とる水徳

水徳

勢ひの小田原所の羽衣日秀木
 伯母のくるよをお娘の菜楓江
 下りの二三人川、客旅に宋阿
 囉ふと掃き取らへとさそを宋之
 物前と来ると新庄の長吐 水徳
 暮菡と洗ふ井戸側には 秀木
 歸空を中ばり合篝の鐘 楓江
 さ—木の板雨らとさそを 執筆

京套の下嬰利真リ

雪のえせ破く岩高—鐘の声 嬰利
 みる野、乃平山初まきとぞ種 宋阿
 眺と見えも挿とる力もぞ 眞道
 問へて教へ人尋ひ甲斐あり 居人
 面ふ言月ひうまの各酒店 東明
 隣園まもるとあるも—母を 盛澄
 乃三兼いら川の書よとせとくを 可孚
 流子と育ひとく帰ふ家物 朝三

謀合の日に揚屋よも笑ひ心
見ハハハハ顔の曠ふ炬
千布

松の如く宝の出たれ
中戸柳
兔足

四老と流を流るは
京原
執筆

侍の卯ハとのまゆ
勸化恨
朝三

雲上月の香控ま
各人
馮川

遠坂の冥途
年咳の
名某
盛治

羽をくハ
岐コヨ
水鳥
勸
未明

菅笠の
枝所
よれ
某さる
子布
男とりめ
草の
君ハ
柔
急を

日夏里の
猿ハ
山さ
ろ
教
西人

鏝ヲ
羨む
金屏の
金
勢利

ろとん
淫の
灯ハ
更ハ
る
を
馬
馮川

こ川
ハ
ふる
母の
嫁入
可
誓

書出
ハ
の
書
を
人
ハ
来
つ
丸
羽
三

呼つ
の
こ
牛
の
吼
あ
え
盛
治

傘ハ
舌
手
洗
川
の
斗
ま
う
了
東
明

既泥の
胡椒
ハ
追
削
ハ
咽
勢
利

唐めり
ハ
鱗
ハ
日
ハ
の
あ
ら
ま
の
魚
乃

る
若
ハ
朽
ハ
名
月
の
土
地
坐
泉

摺紙の稲七刈むと曆之紙千布
 世に望みおし海路る里枯人
 た、人ハきあふと望の中、任弟利
 一いつより律義賢るより可要
 冬足著て酒屋尋ね在糸
 蜻の急こくせ、る篠山 馮川
 歡ひの跡見らむのち、田よ
 枝とるあつたぬ三子と色の草花 居人

京畱鈴興り

雪中をさるのうとをひか付り

蒲か着るた床をこゆー雪の山 富鈴
 多平友あき木くりの跡 宋阿
 石榴、はすをぬ世このう、引了 光笠
 田言ふとく枯れ車坐 志樂
 塗板、月のかみや世あ、む 仙漢
 枝、枝さき稲、う、ふく 埴井
 葉のわさる秋、田をの餅み糸 柳里
 ね立、伊通、何り藤者一艘 田橋

欲傳とさるれく娘とそく家 飛川
 撮り仲りよしはぬ氣 八公
 おこの古、海ころむむとよは 松江
 ころの耳とよは 淡かけ之地 山架
 半為ゆく月とる人志ぬ人 先習
 笑ひひきまき〜衣うちやせ 淡澤
 むす栗の處もきあ〜は酔う地 出文
 先祖の身あそあつか右方 素演
 道にれの出と森のふくれ供 羽奇
 菖菖と追ふて漕を里 井蛙

ナ
 喜ハぬ母は似〜事の多る現 寛留
 窗のひまをの巻くは解 双鬼
 出會南京の中へ、給を〜 片吹
 妹はは〜くれ騎あ〜かある 壺塚
 此杜子ぬも笑あも土地宝 若人
 糸糸子魚とよは 蘇佛縁 童三
 何と〜んひろ〜る月の海 泉計
 在祈禱の平れぬ海 琴舟
 服息〜も〜れ〜見ま〜秋の鳥 翠川
 るあ〜と〜よの〜女房の歌 連玉

一 併もつゝいゝ志のものゝ
 卯くろりあまの藤一鶴 風也
 歩筋と口々波、滝のそよそよ 徒抱
 菴涼しく遊ぶ松林 川石
 香苗と囀る短尺ひびく 清江
 才ふと内とあふとひのそよ 西南
 撰集傾城代この質と巷人 牙院
 柳と柳もそろふ春あそ 子園

一葉散

宝永四丁亥年

辞世咄一葉散

雪中庵不白玄峰居士

風乃上

冬 十月十三日

病中の吟

魂棚やこふおくと茄子河へ
 秋の記念は唐の故の書 宋阿
 十三夜草もそろく 枯そめろく
 萬年つらら名のいれしよ
 校川のふくれぬ町の中をり
 鳥のおとろけさむらの上

赤くと蟬のそのくは酢をちうみ
合羽着るをけ切者講中
壇のありあふち中明を
帯を押しはるを流さくうけ
丸茶の素湯も二人う汲平立
久しき息も是れ幕從
直向う月南の橋船
碧帷子水巾よ一管
き涙髪をいさき為る草履取
諸國へ配る川溪のも

焙燥も破て有るをよむま
出っはり川角鳴也
十
墨張春のり糸のものおもひ
木辻の喧嘩ふまらうよ海
杖ついで素ハ時白の小ころちん
暮といふ麻とや敷はあろ
神速と不^不断喰せく物もよま
赤何の田植百人ハあ
栗のも^な原^な敷くあまハハッ何なり
吾んをきかぬけ敷と

規世音立七あめで豆腐阿王
 おい胃の耳つきこ一規
 冷虫の鳴りしお氣の月
 山材儀新へつうえふ
 大名の四谷をを通る秋の地
 お撲の札立あつち
 白髪をさきりし里の黒おお
 星を又たあつち夕暮れ海
 玄峰臺白ひのやまの花の雲
 庭よむ鳥の声えろあや

句次記到来

そのぬいさく清ぬえ雷佛 我笑
 年あそ種之余まや枇杷の葉 畔石
 降よまを 名い小夜時雨 鏡士
 昔西葉の自ひの絶ぬ普門 品、南由
 月と日よ指理よきくぬ墨の七流 嬰利
 水た夜いおんよやくをちおの玉 千所
 冬山入るれ照るあおり新 東明
 子の名の遠きあまや 枇杷のむ 善澄
 花中よそのあつち 雪の花 居人

下

亦七

照のふ旅時雨の中の一葉ふる 百李
 雪や羽音も氷丸小六舟 鳥夕
 晴てよふあをてつげと時雨ふる 几圭
 風の乳有松のおとと位 可守
 あとつと旅そのきき葉のふかへん 子園
 浮舟の何やう建ても水の節 波光
 舟波ふる、流し橋ふ川がら 宋墨
 手向葉おひらきし方雪 一方
 月雪やあめの末の層雲 馮川
 さうりーやまろのこのあゝ水車 福三

下詠

水仙の玉十ひりまのふ夜ッ傘 如柳女
 石よあゝらう一燈のともしち 宋阿
 繩をされ古ねら人も目をとあゝ 巴牛
 鳥も飛ん身つくろの有 風篁
 望蓮の袖口拵おきるの舟 貞府
 秋の誘ひのおりり文地 笠舟
 下畧
 雪の日やふ人あゝ賣のちり存 風篁

鳴声をぬきよきむ千鳥 巴牛
草菴のあそびも阿比し時雨 世舟
年終とも泪におぬし初しは 尾白列

閑宿境

さ里しそよめをいさむら梅夜 喜雀
哥ま歌 枯葉よふ風自りぬ 巴井
竺の音 尺奴 世の友や 灰の雪 文楼

止あり春景

枯枝や 誰りゆり里のやいふ 水徳
雪うらと 消らう故 中ちあふ 千尺

詩やういふ春をいさむ 玉阿比 香木
古き名よ 尺も手をうけ 枯燈の光 香紫
ふとん着し 唐のいむら 東山 花光
古足袋乃 始 既久しき物 保海
十次式 さうりしと 此 至 巨 燧 至 考
こい 晴 枯 燈 すす 糸 びく 鐘 加 林

あの中 面とる

名よ ぬきよき 葉の花や 二びり 北茂
枯と 柳の芽をふくむ 宋阿
ゆき 雨の流の小池 稗説 魯白

日影さしりて大の麻すゝ
天二月おと見ゆ流りて宿
そよよの吹ぬ端おとと里 白

下畧

松井田

まも木も三川ふ雪の花のまろ 潭考
ま川いぢも流りてぬ中ゆ十夜た 洗玉

お壽町

おとろくもあつ流りまろ毎のぬ 泡水
祢名の息も届くぬぬぬ子 喜水

哉を疎みる押合ぬ齊の僧 全写
あ仙やあそくまー正法の花 名桂
中流れおもてゆーやまの花 阮水

仙臺

五文字の名のこのふりあつて 波山

中里河原

あ石を踏う海の色を流りて 巴籠
いぬくよ立竹城の松葉ふ 理乃
年何春うまはあつて 城

下

四十

落合

おしりのおれこりもあふもを 宋嫁
俺の音・流てさしき斗柱、飛而也

葵沼

国の風旅と吹や 疎と以巴呂

雪中巻吐

世をとおす

次は川

おとちぬ木葉の落と風のうへ 晋流

上州大同

山茶花も冬の味、来は露漬 白東

新降の菖を眺し 雪の夜 指東

篠とあまの 響の一刷毛 叶る 林鶴

表の羽をぬき 也 批 把の花 来 翟

か 坂を流る 風の木の葉 式 かつ

葉のゆ糸の 戸をさす 立の音 文 水

阿波

有明やまの 何とさふら 秋江

笑ぬ 枯木の枝や 雪の花 山紫

高木の 枝をさす 水仙花 江 谷

枯木も 雪て 風 雑の 水 西 池

紅葉のあそびの谷や三田川 芦尻

東都 吹仁通西昆雜

獨身とあり凡の枯柳 午寂

名をのりし清く快哉や雪佛 初言

7川の雪と月見とる我安婆の雪立圃

我よりぬ佛もあとしかへり花陶中

みゆれは河の流の友らとを可因

鼻息とくくく拭ふや水仙花 立柳

経師程の糊とそれと一葉の月 作言

木しや唇かいく 經礼 未か

川筋と河とや寺地の忍びは穠 芝光

くくくのやその香とさあてり川の海 沙文

叶る流習つる産と坐蒲たぬ 詩魯

屋敷をさすけ膝を

あつちうしと云や春ると

物とありしと々々ハ

ひくくくゆー昔し哀の疎 篋佳

和くくくき曲や瓦上の枯柳 桃侯

枝^(夜)片やその葉赤く夜の吟 三出

意六忘し^(着)看とてり夢れくし有 故一

乾るぬやるとおれ雪と水の凍 左文
念佛の友と交る大楠ヶ原 魯洞
虱もも 辭を日夜のぬふも 訥子
きこひ 末孔雪の垣根のミそこひ 三壘
時そぬ旅のうさーや十夜道 少家
お人の菅笠かかくーく 淋通
今もその月日(遠か) 枯柳 桑園
摺鉢のみそこめらまや 寺の萩 宰令
ふき桶のぬいけ 洗玉ー 百菴
木ーの吹ひーを 菴の禾 我兄

有明の朝や見ぬ世の友らと坐 有佐
ふとて押こもろん時るけ 平砂
着の葉やうれもも 憂いもの節 祗丞
海より山吹のふり起時雨小 平澤
竹を枯野一草のひくま 女川

追か

むしをーう 祢め、原の雪の香 棒菴
やう 晴れ十夜の花や 藪年 巴文

下

四十三

笑ふ顔のまは佛也や牡丹 萱草
も月雪をば回めくふのち向成 赤鯉
枝一葉をもちく見ききく代雪水
外枯の中よさる一木 巴喬
月の友語もつる一や雪のちり巴章
月花のそ葉のおりく開山三丈田

るま菴子花花らうのなる人々
甚有月見高ありと
師の月見歌は花らうの
花と化し花らうの
時と化し花らうの
さあやう花らうの
う花らうの
あ子世に辞し花らうの
三十三の書林花らうの

下

84B

昔子とてとらりて
清々其年改は
去ぬ子とてとらりて
予暇成岡も毛張り
久し心の中へ
氣おとるに
清くとも仰る
師のちるも

句
ぬ

おの
宗阿

元文卯年冬上月

昭和丁巳年八月廿九日

原奉極岸文庫

字校合了

後定記

